

法華經における生命觀

望 月 海 淑

1

人間の生命がどこから来たって、どこに赴くものであるのかは、誰にも答えられないものであると、考え来たっている。しかも、近ごろの科学万能主義的な考え方には、ややもすると、この問題について、近い将来に結論をだすのではないかと錯覚するむきを生ぜしめているような気配すらある。しかし、私はここでこのような在り方について、とかくの論を展開しようとは思わない。

何故ならば、仏教のものとのらえ方は、もっと別のところにあると考えるからである。

仏説箭喻經は、人は死んだ後、どこへ行くのか、どこから来たのか、と、仏弟子が釈尊に質問をした、しかし釈尊は答えなかった。答えがないので、仏弟子はさらに質問を繰り返した。何度目かの質問の後に、釈尊はその仏弟子に対して、無記と答えたのみで、其の答えをしなかった、という故事を示している。⁽¹⁾この説話は単に阿含經の中の説示だとかたずけて、すましてしまふべきものではないであらう内容をもっていると思われる。

仏は bud の過去分詞の Buddha を訳したものであるから、それは悟った人を意味する。したがって仏は天地創造の神のように、一切の物を作り出したわけではなく、物や人が様々集まり、織りなしている関係模様についての、人

法華經における生命觀(望月)

の処しかた、ありかたについて悟ったものであり、悟りの内容について語ったものが、教えとなったと理解をすることができらるであらう。

2

法華經は一仏乗と久遠実成を説いたといわれるが、実はこの両者はともに、一つのものを別の立場に立って表現してみたにすぎないものであらう。その一つのもの、それは人の生命というテーマであらう。そこで以下、人の生命について、法華經の言葉の中に道を尋ねてみたいとおもう。

方便品は一仏乗を説くことが、仏の出世の本懐であることを述べているが、この説示をうけた譬喩品は、仏と舍利弗との關係にふれて、

我昔曾於三二万億仏所。為無上道故常教化汝。汝亦長夜隨我受學。我以方便引導汝故生我法中。舍利弗。我昔教汝志願仏道。汝今悉忘。而便自謂得滅度。我今還欲令汝憶念本願所行道故⁽²⁾と述べて、今こそ法華經を説くのだとしている。この箇所での正法華經は、

曾以供奉三十二千億仏。而為諸仏之所教化。當成無上正眞道。吾身長夜亦開導汝以菩薩誼。爾緣此故與在吾法。如來威神之所建立。亦本願行念菩薩教。未得滅度自謂滅度。舍利弗。汝因本行欲得⁽³⁾識念無央數仏。

と説いている。しかし、梵文法華經のこの箇所には、

mayā tvam Sariputra viṃśatīnāṃ buddha-kōṭi-nayuta-śata-sahasrāṅgām antike paripācīto 'nuttarāyā-

ṇ samyak-saṃbodhan | mama ca tvam Śāriputra dirgha-rātram anusīkṣito' bhūt | sa tvam Śāriputra
bodhisattva-saṃmantriena bodhisattva-rahasyenēha mama pravacana upapaṇaḥ | sa tvam Śāriputra
bodhisattvādhiṣṭhānena tat paurvakaṃ caryā-praṇidhānaṃ bodhisattva-saṃmantriṇaṃ bodhisattva-ra-
hasyaṃ na samanusmarasi | nirvṛto 'smiti naryase | so' haṃ tvam Śāriputra pūrva-caryā-praṇidhāna-
jñānānubodhan anumārāyitu-kāma^(*)

(舍利弗よ、私によって汝は、二十、百千万億那由佗の仏のもとで、無上等正覚に達するように成熟された。舍利
弗よ、汝は長い間私の弟子であった。舍利弗よ、汝はかの菩薩の計画、菩薩の神秘によって、この世で私の教えの
中に生まれた。舍利弗よ、汝はかの菩薩の立場によって、前世の所行と本願を、菩薩の計画と菩薩の神秘を思いお
こさないで、私はさとしたと考えている。舍利弗よ、私は汝に前世の所行と本願と智慧の回想を思いおこさせよう
と欲して・・・)

と示されている。

この三本の説示は、発言には違いがあるとしても、内容においては大差はないものと思われる。すなわち、舍利弗
は前世において、沢山の仏につかえ、そのもとで行をつみ、教えをうけ、その功德によって、もう一度来世に仏のも
とに出現したい、と願をおこし、仏がその願を受けとめられたので、舍利弗の現世の生命がある、それなのに舍利弗
は、そのことに気づかず、むしろ自分の前世のことを忘失してしまっているから、仏は今、法華経を説くのだとして
いる。

このときの願は、*prañidhāna* という言葉で表現されるもので、前世は *pūrva* によって示されている。*pūrva* は、

法華経における生命観(望月)

法華經にける生命觀（望月）

一年二年の先のことではなくて、はるかな昔のことを意味する言葉であるから、それは久遠の昔とつながる意味あいをもっている、捉えることが出来るであろう。

そこで注意しなければならないことは、前世の行いと本願（本願所行道・因本行）を思いおこさせるために法華經を説くのだ、という一句があるということであろう。

法華經が説かれるのは、単なる偶然なことではなくて、仏と法華經を聴聞する人とは、前世からのつながりがあるということ、意味している、と受けとめるあり方が求められているからである。

したがって、舍利弗という名前を一人の固有名詞ではなくて、人間一般を意味すると受けとめる時、譬喩品のこの一句は生きてくるであろう。現世において法華經にお会いした人がおるならば、その人ははるかな前世において、釈迦牟尼仏にお会いし、縁を結んだ人であり、その縁の故にこそ現世の生命がある、と捉えることが大切であろう。久遠の昔とのつながりというのは、このような意味あいをもっている。

しかして、法師品の冒頭のところにも、譬喩品の説示にかかわるものをみる事が出来る。

妙法華經は、藥王菩薩によせて仏は八万の菩薩たちに語った、として、法華經の一偈一句を聞いて一念隨喜する者には、仏は授記を与えるとし、更に、如来の滅後に法華經の一偈一句を聞いて一念隨喜する者には、無上等正覺の授記を与えるとして、法華經の一句を受持・説・誦・解説・書寫し、この經卷をうやまいみることに仏にたいすることくにし、様々な供養をなす人は、

已曾供養^三十^二萬億^一。於^三諸^二佛所^一成^三就^二大願^一。愍^三衆生^二故生^一此人間^五。
としており、この個所に該当する正法華經の文は、

前已奉_レ侍億百千仏_一。從_レ億百千仏_一發意立願。是等儻類。慙_レ傷衆人一_故來生耳。⁽⁶⁾
であり、兩本ともに、沢山な仏につかえ、そこで願をおこし、衆生をあわれむがための故に、世に出現したものであ
ることを示している。そこで梵文法華經をみると、

paripūrṇa-buddha-kōṭi-nayuta-śata-sahasra-paryupāsītāvīnas te Bhaisajyarāja kulaputrā vā kuladhūhī-
aro vā bhaviṣyanti | buddha-kōṭi-nayuta-śata-sahasra-kṛta-praṇidhānās te Bhaisajyarāja kulaputrā vā
kuladhūhīaro va bhaviṣyanti | sattvānām anukampā 'rtham asmiñ Jambudvīpe manuṣyesu pratyājāta
veditavyāñ |⁽⁷⁾

(薬王よ、かの善男子善女人等は、百千万億那由佗にみちる仏等に仕えるものとなるであろう。薬王よ、彼らは百
千万億那由佗の仏のもとで、本願をたてたものとなるであろう。(彼らは)衆生たちへのあわれみのために、この
閻浮提において人間達の間で再生したと、知るべきである。)

とあって、両漢訳經典と同様の意をしめしている。

更に法師品は、この説示につづいて、どういふ人々が未来世において仏になりうるかについて、法華經の一偈一句
に対して五種法師の行をなし、仏に対するように法華經に相對する人は、大菩薩にして、未来世に仏となる人だと述
べた上で、

成_三就阿耨多羅三藐三菩提_一。哀_三愍衆生_一願生_三此間_一。広演分別妙法華經。⁽⁸⁾

と述べ、このような人は、仏となるべき人であるから、人間として生まれ出なくてもいいのに、自分から願ってこの
世に生まれ出た人であることを示している。

法華經における生命觀(望月)

この箇所での正法華経は、

則普懲^二傷諸天世人^一。從^二其所願^一而得^二自恣^一。常生^二人間^一欲^レ演^三斯經^一。⁽⁹⁾

と述べ、妙法華経と同様な意をのべ、梵文法華経もまた、

pariṣpannaḥ sa Bhaiṣajyarāja kula-putro vā kula-duhitā vā 'nuttarāyāṃ samyak-sambodhan vedita-
vyas tathāgata-darśi ca veditavyo lokasya hitānukampakah prañidhāna-vasenōpapaṇno 'smiṃ Jambud-
vīpe manusyeṣv asya dharmā-paryāsyā samprakāśanātāyai |⁽¹⁰⁾

と述べて、この世に出現してきたのは、前生における本願の力 prañidhāna-vasa によっていることを示している。

これらの説示によって知られることは、法華経がとらえている人間は、現世の一面面だけでとらえるべきものではなくて、前世とのつながりの中で理解すべきだ、ということであろう。それ故、法師品は、法華経を説く人は、自ら清浄なる業のむくいを捨てて、仏の滅後に衆生をあわれむ故に、この世に出現した人であることを明示し、この人は如来の使であり、如来によって遣わされたひとであり、如来の事を行ずる人であるとしめしてさえている。

すなわち、人の生命は五十年、八十年というような、動物的な長さで考えるべきものではないということを、意味していると思われる。この仮説がお認めいただけるならば、人の生命の長さも心のあり方とかかわっていることが、いや、心のあり方とかかわったとらえ方がなされなければならないというべきだと思われる。

見宝塔品の後をうけて従地涌出品が説かれているが、この両品の間にも、考えてみなければならぬ問題がある。

見宝塔品は大地の下から七宝塔が涌出してきて、虚空の中に浮かんだとしているが、この所の表現は、妙法華經によると、

從_レ地涌出住_二在空中_一 ⁽¹⁰⁾

となっており、正法華經は、

超_二在虚空_一自然而立 ⁽¹¹⁾

となされて、妙法華經が空中としているのに対して、正法華經は虚空としているのがわかる。一方、梵文法華經は、

abhyudganya vaihāyasaṃ antarikṣe samavāsiṣṭhac cītro darśaniyah ⁽¹²⁾

(様々で美しい、(塔は)涌き出ると空中にとどまった。)

として、両經の訳語・空中、虚空にかかわるものは、antarikṣaであることを示している。

しかして、從地涌出品では、地涌の菩薩の地下の住所と、涌出した後の住所について、

先尽在_二此娑婆世界之下_一。此界虚空中一住。……是諸菩薩從_レ地出已。各詣_二虚空七宝妙塔多宝如来积迦牟尼仏所_一。

……爾時四衆亦以_二仏神力_一故。見_レ諸菩薩遍_二滿無量百千万億国土虚空_一 ⁽¹³⁾

と妙法華經は示し、正法華經は、

在_二於地下撰護土界_一……從_レ地涌出。或從_二上下_一。或四方来。至_二忍世界_一悉住_二空中_一。見_二于滅度多宝世尊能仁大

聖_一……爾時世尊。即如_二色像_一現_二其神足_一。令_二四部衆_一悉得_レ普見_上。又使_レ念_レ知此忍世界。諸菩薩衆於_二虚空

中_一。各各撰護百千仏土_上 ⁽¹⁴⁾。

となして、妙法華經の虚空の訳にたいして、撰護土界なる訳をしていることがわかる。梵文法華經は、

法華經における生命観(望月)

ye 'syān mahā-pṛthivyaṃ adha ākāśa-dhātau viharanti smēmān eva Sahāṃ loka-dhātūn nīṣṭitya . . . te cōnmañjyōnmañjya yena sa mahā-rātra-stūpo valihāyasam antarikṣe sthito yasmin sa bhagavān Prabhūtaratnas tathāgato 'rhan samyak-sambuddhaḥ parinirvṛto bhagavata Śākyamuninā tathāgaten-ārhatā samyak-sambuddhena sārđhaṃ śiṃ'āsane niṣṇaṇas tenōpasanīkrāmanti sma | . . . attha khalu bhagavāns tathā-rūpaṃ riddhy-abhisamkāram akarod yathā-rūpeṇa riddhy-abhisamkāreṇābhisams-krtena tās catasraḥ parśadas tam evāikaṃ pascād-bhaktam samjānante smēmān ca Sahāṃ loka-dh-ātūn śata-sahasr'ākāśa-paripṛthiṅ bodhisattva-paripūrṇam adrākṣuḥ |

(彼ら(地涌の菩薩)は娑婆世界にかかわる大地の下の虚空世界に住んでいた。 . . . 彼らは出現するたびに、入滅した尊い等正覚者の多宝如来と、尊い等正覚者の釈迦牟尼如来とが、ともに獅子座にすわっている空中の中の大宝塔にかつじた。 . . . その時、世尊はかくの如き神通力の働き、そのような神通力の作用をなしたので、四衆は食事の後の一時と思い、この娑婆世界は百千の虚空に拱護せられて、菩薩が満ちているのが見えた。)

これによって分かることは、妙法華経は三箇所にわたる説示において、すべて虚空という訳語を使用しておるが、正法華経は三箇所のうちの、最初と最後では拱護土界の訳語を使い、二度目の所では虚空中の訳語を使用していることである。しかし、梵文法華経は最初と最後の所で、ākāśa 虚空を、二度目の所では antarikṣa 空中を使用している。すなわち、ākāśa と antarikṣa とでは、とうぜん意味する所はちがっているから、正法華経は二つの訳語を使用したわけである。それなのに何故に、妙法華経は両者を同一の訳語で済ましたのかは、分からない。

antarikṣa は、青空とか曇り空とかいう時の、あの空のことである。空の広がりがどのようにに広く、どのように高

く、どのように果てしないものであるかは、捉えようはないであろう。その意味では、空は無限の広がりということ
は出来るであろうが、しかし我々は青空、曇り空とかいうように、この空を物として、形があり、色があり、姿があ
るものと同じように捉えているということが出来るであろう。すなわち、空は有限なものであるということになる。

これに対して、*अवकाश*は、三千世界を包みこんでしまうような無限な広がりであるが、同時にこの広がり、心の
中の広がりとは差がない、というふうにさえいわれるから、それは観念的・唯心的なもので、心によって自在に思い描
ける広がりということが出来るであろう。

こう考えてみると、*अवकाश* 空中と *अवकाश* 虚空との間には、大変に大きな隔たりがある、といわなければならな
い。空中は即物的な広がりであり、虚空は唯心的な広がりだといえよう。それ故、妙法華経が両者を同じ語で訳出し
たのは何故か、わからない。

正法華経は *अवकाश* を撰護土界と訳しているが、先に引用した経文によると、娑婆世界にいる菩薩達は空の中におい
て撰護百千の仏土を念知した、とあるから、これは娑婆世界でありながらも、同時に、そこが諸仏に護念せられる場
所である事を意味しているであろう。

このことは、撰護土界と訳出された *अवकाश* の語は、信仰の立場に立っての心の広がり、仏と私とのつながりの世界
を意味すると、受けとめるべきことを示した、と理解すべきことを意味するであろう。したがって、*अवकाश* は地下の
虚空にも存在することが出来るし、空中にも存在することが出来るし、この人間世界にも存在することが出来るし、
心の中にも存在することが出来るわけである。すなわち時間と空間をとり越えた世界、それが *अवकाश* の世界だとい
うことになるであろう。

法華經はこの地下の虚空から沢山の菩薩達が、涌き出してきたことを示しているが、この時、地下の虚空を形あるものとして理解しようとする、法華經はたわごとを説く経だということになってしまふであろう。信仰の世界、心の領域として捉える時、それは生きて、聞く人の心に響くものとなるであろう。

したがって、弥勒菩薩を初めとする沢山な菩薩達にとって、このことが信ぜられなかったのは、この人達には、虚空不可説の眞の捉えかたが出来ていなかったことを意味しているであろう。白髪の老人が父親で、黒髪の青年が息子だというのは、まったく世間一般の通念に外ならない。信仰の世界、法華經が思い描く人間の在り方は、この世のあたり前な通念を飛び越えたところにあるのであろう。

地涌の菩薩の名前が、經典の他の名前とちがって、行い一般の在り方にたいしてつけられたものだ、ということ、すでに知られているところである。

このように考えて来る時、現実の場面である娑婆世界と、觀念の世界たる心の領域、信仰の世界とのつながりが、重大な問題としての意味を持つてきていることに気づかされるであろう。それは現在と過去を結び付けるものであり、現実と未来を結び付けるものでなければならぬ。そして、その鍵をにぎるものとしての説示の一つが、先述した本願(誓願) *prañidhāna* にかかわるところの、人間の捉え方であるといえよう。

何故ならば、現実の人間が過去・未来と結びつくのは、自己の心の在り方にのみかかわることがらである、と思われるからである。自己の心の中の過去・未来との結びつき、それは自己の生命を己が立てた本願によるものとしてとらえることにあるとおもわれる。

しかして妙法華經は、この会に集まっている人々は、釈尊を悩ませることはないか、との地涌の菩薩達の質問を奉

げている。これに対して釈尊は安楽だとした上で、

是諸衆生世世已來常受我化⁽¹⁷⁾。

と述べている。これは地涌の菩薩だけが、仏と前生からのつながりをもっていただけではなくて、法華経に縁をもって
いる人々は、全てが仏と前生からの縁においてあることを示したものであろう。正法華経は、

斯之品類。乃於往古諸平等覺⁽¹⁸⁾。

としているが、往古とは前生のことを意味するから、内容は妙法華経と同様である。梵文法華経は、

mamāva hy ete kula-putrāḥ satvāḥ paurvakeṣu samyak-sambuddheṣu kṛta-parikarmāṇo⁽¹⁹⁾

(私に属するこの善男子らは、前生において等正覚者のもとで、修行をなしていた)

として、前生が paurvaka であるとなしている。この言葉は前の世を意味し、先祖からのつながりを意味するから、
それは漢訳の両親と全く同じ意味あいを示しているといえるであらう。

すなわち、法華経は經典に縁をもちえた人を、すべて同様に扱っていることを知りうる。しかし、その扱いの鍵
は前生からのつながりということであるから、前生からのつながりを、如何に心に捉えているか、ということが大切
な要素となるであらう。

4

從地涌出品における弥勒菩薩の、白髪の老人と黒髪の青年の關係を挙げての質問にたいして、釈迦牟尼仏は如来寿
量品で、解答をあたえている。

法華経における生命観(望月)

それによると、第一は伽耶城をさること遠からざるブッダガヤで、釈尊は生まれたと人々は考えているけれども、実はそれは真実ではなくて、釈尊の出世は久遠の昔であるとし、第二は衆生を教化するために方便をもって、滅度を示して見せたにすぎないとするものであった。

この説示の根底にあるものの見方は、

我成仏已来甚大久遠。寿命無量阿僧祇劫常住不_レ滅。……我本行_二菩薩道_一所_レ成壽命。今猶未_レ尽倍_二上數_一。然今非_二實滅度_一。⁽²⁰⁾

という一句であろう。この語句に対応する正法華經は、

成_二平等覺_一已来大久。壽命無量常住不_二滅度_一。又如來不_二必初始所_一説。前過去世時行_二菩薩法_一。以為成就壽命限也。又如來得_二佛已來。復倍_二前喻_一。⁽²¹⁾

と示しており、仏が悟りを開いたのは久遠の昔のことであるとして、我本行は過去世の時であることをしめしている。そして梵文法華經は、

tāvaca-cirābhissambuddho 'parinirvāyaṣṣ-pramāṇaṃ tathāgataḥ sadā sthitaḥ | aparinirvāyaṣṣa tathāgataḥ parinirvāṇam ādarsayati vaineya-vasena | na ca tāvaṃ me kula-putrā adyāpi paurviki bodhisattva-carya parinipāditiāyus-pramāṇam apy aparipūrṇam | api tu khalu punaḥ kula-putrā adyāpi tad-dvi-guṇena me kalpa-koṭi-nayuta-sata-sahasraṇi bhaviṣyanty āyus-pramāṇasyā paripūrṇatvāt |⁽²²⁾

（久しい久遠の以前に覚った無限の寿命の長さの如來は、常に存している。如來は入滅せず、教え導くために涅槃を示す。しかも善男子よ、今も私は前世における菩薩の行を成就していないし、寿命の量を満たしてはいない。実

に又、善男子よ、私の寿命が満つるまでは、今なお百千万億那由佉劫の二倍もあるのだ。）

として、如来は前世からのつながりの生命をもち、その時に積んだ功德が果てしなく続くことをしめしているから、意志においては漢訳兩經と差異はなく、我本行、過去世、前世 *Paṭiviki* を、同一内容を示す語として受けとめることができる。

すなわち、法華経がもっている生命観として、我々はここで、前世 *Paṭiviki*, *pūva* という一句を、度外視していくわけにはいかないであろう。言い換えると、人の生命は前世と仏とのつながりで捉えようとする時、久遠の生命に転換されるものであることを知ることが出来ないのは、人をもまた物としてしか捉えようとしないうり方によるからであろう。人には姿形のみではなくて、氣質・心の伝承もあることは見逃すことはできない。この心・氣質は外部からでは、目には出来ないものである。してみると、我々がものをありのままに捉えるということは、この目に見ることが出来ないものまでも、捉えるということではなければならない。

そのようなものの見方、それが前世とのかかわりの中で、仏と私とのつながりを、わが心に思い定めておく、というあり方ではなからうか、とおもわれる。したがって、そのあり方を明白ならしめるために、虚空 *Śūnyatā* の場面に説法の舞台を移しておくことが、必要な事柄であったと考えられる。

すなわち、法華経は仏と人間とのかかわりあい、説示しようとした經典であり、この説示のために、方便品の一仏乗、譬喩品での前世からの仏にたいして立てた本願によって現世の生命があること、法師品の現世の生命は前世の願業によってあること、従地涌出品での地涌の菩薩とその住所、如来寿量品での久遠の生命の展開とが説き示されたものである。したがって、それら各品はたがいに孤立したものではなくて、それぞれつながりあっているものとし

て、関連づけて捉えられていなければならぬ。それゆえにこそ、仏の生命が久遠実成だという時、それはわが身の生命の無限性を説いたものとして、受けとめられるのであろう。

日蓮聖人は、その著「開目抄」の中で、

善に付け悪につけ法華經をすつる、地獄の業なるべし。本願を立。⁽²³⁾

と述べ、更に、「観心本尊抄」の中では、

今本時娑婆世界離三災^レ出三四劫^レ常住淨土^{ナリ}。仏既過去不^レ滅未來不^レ生^セ。所化以^{ナリ}同体。此既己心三千具足三種世間也。⁽²⁴⁾

と述べて、ともに「本」に言及している。

上來見てきたところによると、この本は前世にかかわるものの捉え方を意味しており、仏と人とのつながりあいを意味しているから、ここで「本」といわれた日蓮聖人の御意図は、釈尊と私・日蓮とのかかわりのあり方を示すことであつた、ということが出来るであらう。すなわち、本願を立^レ、といわれた本願は、前世において日蓮聖人自らが釈尊のもとで立てられた願であり、今本時といわれた本時とは、前世において釈尊におあいをし、その時に釈尊とともによごされた、その時を意味する言葉として、受けとめられていなければならないであらう。

このように、法華經に示される「本」という言葉の使われかたを、子細に検討してみる時、そこには仏と人との無限のつながりを示す意味合が、こめられていることが出来るであらう。そして日蓮聖人における「本」の使用のしかたにもまた、同じような意味合を、認めることが出来るように思われる。⁽²⁵⁾

すなわち、法華經をこのように捉える時、人の生命もまたこの延長上で、捉えられなければならないことを意味するであらう。そして、それが認められる時、初めて、仏の久遠実成の生命と我々凡夫の生命とが、お互いにかかわり

あうものとして、理解されることになるであろう。法華経が久遠の生命を説くことが出来るのは、この点にゆらいす
るといふことができよう。

〔註〕

- (1) 大正一・八四上〜八五下
- (2) 大正九・一一中
- (3) 大正九・七四—上
- (4) *Sad.* 六四〜六五
- (5) 大正九・三〇下
- (6) 大正九・一〇〇中
- (7) *Sad.* 二二四〜五
- (8) 大正九・三〇下
- (9) 大正九・一〇〇下
- (10) *Sad.* 二二六
- (11) 大正九・三二中
- (12) 大正九・一〇二中
- (13) *Sad.* 二二九
- (14) 大正九・四〇上
- (15) 大正九・一一〇中〜下
- (16) *Sad.* 二九八・二九九・三〇〇
- (17) 大正九・四〇中
- (18) 大正九・一一一上
- (19) *Sad.* 三〇一
- (20) 大正九・四二下

法華経における生命観(望月)

法華經における生命観(望月)

- (21) 大正九・一一三下
- (22) Sad. 三一九
- (23) 日蓮聖人遺文・六〇一
- (24) 日蓮聖人遺文・七二二
- (25) 拙著「観心本尊抄における「本時」考」(『野村耀昌博士古稀記念論集仏教史仏教学論集』)三四三～三五八、拙著「本願を立考」(『櫻神』五六〇号)・四五～六八